

思春期・青年期の「いじめ」に影響を与える家庭関連要因の検討

東京都精神医学総合研究所 統合失調症研究チーム 西田 淳 志

Associations between adolescent bullying involvement and family related factors

Department of Schizophrenia Research, Tokyo Institute of Psychiatry NISHIDA, Atsushi

要 約

目的：中学生・高校生のいじめと家庭関連要因（世帯構成・兄弟構成，大人からの暴力）との関連を検討する。

方法：三重県および高知県の公立中学校・高等学校の協力を得て，18,104名を対象とした自記式質問紙による疫学調査を実施した。

結果：いじめの被害体験には，両親との同居に関する状況，同胞の有無，最も年齢の近い同胞との年齢差と有意に関連すること，また，同居している大人からの暴力体験は，いじめの被害体験・加害体験の双方と有意に関連することが明らかとなった。

結論：いじめは，思春期・青年期の若者の意思や行動を超えた家庭環境に関連する諸要因によって有意にリスクが高まることが示唆された。

【キー・ワード】 いじめ，家庭関連，思春期，虐待，兄弟姉妹，横断研究

Abstract

Objective: To test whether family factors are associated with adolescent's involvement in bullying, over and above their own behaviors that increase their risk for becoming involved in bullying. Method: Experiences of bullying (as victims, bullies, or bully-victims), family structure, violence from adults were studied using a self-report questionnaire administered to 18104 Japanese adolescents. Results: Being a victim of bullying was significantly associated with family structure (living with/ without parents and age gap between siblings) and violence from adults in the home. Being a bully was significantly associated with violence from adults in the home. Conclusion: Family factors are associated with adolescent's risk for becoming involving in bullying over and above their own behaviors

【Key words】 bullying, family factors, adolescent, abuse, siblings, cross-sectional study

はじめに

思春期において「いじめ」は高頻度に発生する(Arseneault et al., 2009, Nansel et al., 2004)。この時期に体験するいじめは、その後の人生における精神疾患や自殺関連問題のリスクを有意に高めるなど(Klomek et al, 2009, Herba et al, 2008, Sourander et al, 2007), 若者の人生に長く甚大な影響を与えることが明らかとなっている。いじめを予防する効果的な対策が求められて久しいが、いじめに影響を与えるリスク要因・予防要因の検討が未だ十分になされぬまま、概ね加害者側への制裁や処罰といった対策がとられる現状に留まっている。

一方で、最近の諸外国における疫学研究では、地域、家庭、学校の環境が思春期の若者のいじめに有意に影響を与えることが明らかになっている(Bowes et al, 2009)。こうした若者を取り囲む地域・家庭・学校の環境構造が若者自身の意思や行動を超えていじめに影響を与えているとしたら、そうした環境構造の修復がいじめのリスクを低減させる可能性が出てくる。

今日、少子高齢化、核家族化、離婚増加などにより、若者たちを取り囲む環境、特に家庭環境は、大きく変化している。その中で、世帯構成や兄弟(同胞)構成などが多様化しつつある。こうした家族構成の多様化が、子どもの対人関係能力の発達やいじめの発生に影響を与えている可能性について、未だ国際的にも検討がなされていない。

また、近年、親からの虐待・暴力を受けている子どもは、そうでない子どもに比べ、学校でのいじめに巻き込まれるリスクが有意に高いことが諸外国の研究で明らかになっている(Shields & Cicchetti, 2001)。しかしながら、我が国において、家庭における大人からの暴力と、思春期・青年期のいじめとの関連について疫学的に検討した知見はない。

以上を踏まえ、本研究においては、中学校・高等学校におけるいじめと、家庭における諸要因、特に、世帯構成・兄弟(同胞)構成、大人からの暴力との関連を大規模な思春期・青年期地域標本を対象とした疫学調査によって明らかにする。

方 法

標本と調査手続き

2008年11月から2009年3月にかけて、三重県津市教育委員会ならびに高知県教育委員会の協力を得て三重県津市および高知県全域の公立中学校・公立高等学校を対象とした大規模な疫学調査を実施した。

本調査は、中学生および高校生を対象とした無記名自己記入式の質問紙調査であり、各教育委員会を通じて各学校に調査協力要請を行い、同意が得られた学校において調査を実施している。調査実施に際しては、保護者への説明を文書にて行い、同意が得られない保護者の生徒に対しては予め調査対象から除外している。また、調査時には、各クラス担任から生徒に対して調査への協力は任意であることを説明した上で実施している。なお、生徒の回答が研究関係者以外に見られないようにするため、あらかじめ厳封用の封筒を配布し、回収時には回答を厳封したうえで提出するよう依頼している。本

研究調査の倫理的手続きについては、東京都精神医学総合研究所研究倫理委員会、ならびに高知大学医学部研究倫理委員会にて承認を受けている。

評価項目

本調査では筆者らによって開発された思春期精神病理に関する自己記入式質問紙を使用している(Nishida et al., 2008)。上記質問紙には、性別、年齢、家族構成、同居状況等の demographic data の他、本研究で用いた以下の項目が含まれている。いじめについては、「この1年以内に、いじめられたことはありましたか?」、「この1年以内に、誰かをいじめたことはありましたか?」の2項目によって、過去1年以内のいじめの加害体験、被害体験を確認している。また、「この1カ月以内に、いっしょに住んでいる大人から暴力を受けたことはありましたか?」の1項目によって、過去1カ月以内の同居中の大人からの暴力体験の有無について確認している。上記3項目(いじめ2項目、大人からの暴力1項目)については、「はい」・「いいえ」の2件法で回答を求めている。

統計解析

本研究では、いじめの「加害体験」および「被害体験」の各々と家族構成や大人からの被暴力体験との関連をロジスティック回帰分析にて検討している。まず、家族構成に関する項目(両親との同居、祖父母との同居、同胞の有無、最も年齢の近い同胞との年齢差)、大人からの暴力に関する項目、年齢、性別に関する項目をそれぞれ個別に独立変数として投入し、非調整オッズ比(unadjusted ORs)を算出した。その後、上記すべての項目を独立変数として同時に投入し(強制投入法によるロジスティック回帰モデル)、変数間の相互影響を調整した調整オッズ比(adjusted ORs)を算出している。

家族構成に関する項目のうち、「最も年齢の近い同胞との年齢差」については、「同胞なし」、「1~3歳差」、「4~6歳差」、「7~9歳差」、「10歳以上」、「双生児・三つ子」の6つのカテゴリーに分類している。本研究における統計解析は、SPSS ver.16 日本語版を用いて行っている。また、 p 値 <0.05 を統計的有意とする。

結果

記述統計

津市教育委員会ならびに高知県教育委員会を通じて調査依頼をした公立中学校・公立高等学校のうち、中学校 45 校、高等学校 28 校の計 73 校から協力同意を得た(総生徒数 19436 名)。そのうち、調査実施日に欠席していた生徒(798 名)、および協力に同意が得られなかった生徒(397 名)を除く 18250 名から回答が得られた。さらに、本研究において必須(いじめ、家族構成)とされる項目への回答に不備・欠損等が認められ 146 名分の回答を除く、18104 名の有効回答が得られた(協力率 93.1%)。中学生が 8620 名(48%)、高校生が 9484 名(52%)であった。男女比は、中学生群で男子 52%、女子 48%、高校生群で男子 48%、女子 52%であった。

いじめの頻度

過去 1 年間のいじめ被害体験は、中学生群の 11.2%、高校生群の 4.2%に認められた。一方で過去 1 年以内のいじめ加害体験は、中学生群の 15.9%、高校生群の 4.2%に認められた (表 1)。中学生群では、高校生群に比べ、いじめの加害体験・被害体験ともに顕著に高く、また、男女間の比較においては、加害体験・被害体験ともに女子より男子群で有意に頻度が高いことが確認された (表 2・表 3)。いじめの加害体験と被害体験の両方を有する生徒 (重複群) が中学生群で 4.7%、高校生群で 1.1%存在した (表 1)。

表 1 中高生集団における過去 1 年以内のいじめの被害体験・加害体験・重複体験の頻度 (N = 18077)

性別	N	年齢	いじめの被害体験・加害体験・重複体験の頻度							
			被害・加害体験ともになし		被害体験のみあり		加害体験のみあり		被害・加害体験ともあり	
			平均	N	%	N	%	N	%	N
中学生	男子	4446	3313	74.5	285	6.4	603	13.6	245	5.5
	女子	4147	3368	80.7	278	6.7	366	8.8	162	3.9
	合計	8620	6681	77.5	563	6.5	969	11.2	407	4.7
高校生	男子	4546	4066	89.4	140	3.1	267	5.9	73	1.6
	女子	4938	4638	93.9	156	3.2	110	2.2	34	0.7
	合計	9498	8704	91.8	296	3.1	377	4.0	107	1.1
全合計	18077	15385		859		1346		514		

いじめと関連する家庭関連要因

いじめの被害体験と関連する家庭関連要因 (表 2)

いじめの被害体験と有意な関連が認められた家庭関連要因としては、「父母との同居」、「最も年齢の近い同胞との年齢差」、「同居している大人からの暴力体験」であった。両親と同居している生徒は、片親と同居している生徒、ならびに両親とも同居していない生徒の各群に比べ、有意にいじめの被害体験のリスクが低いことが明らかとなった。また、同胞のいない生徒の群に比べ、1~3 歳差の同胞がいる生徒の群では、いじめの被害体験のリスクが有意に低いことが示唆されている。

「過去 1 カ月以内に同居中の大人から暴力を受けた体験を有する生徒」は、そうでない生徒に比べ、いじめの被害体験のリスクが 4 倍以上に高くなることが明らかとなった。

表 2 いじめられ体験（被害体験）*と関連する家庭関連要因
(中学生 N = 18104) (ロジスティック回帰分析**)

変数	パラメーター	Unadjusted odds ratios			Adjusted odds ratios***		
		OR	95% CI	p value	OR	95% CI	p value
年齢		0.72	0.70 - 0.75	< 0.001	0.73	0.71 - 0.76	< 0.001
性別	男子	1.00		0.001	1.00		0.005
	女子	0.82	0.74 - 0.92		0.85	0.76 - 0.95	
父母との同居	父母ともに同居している	1.00		0.051	1.00		0.001
	父母のいずれか一方と同居している	1.08	0.94 - 1.24		1.16	1.00 - 1.33	
	父母ともに同居していない	1.33	1.05 - 1.69		1.58	1.23 - 2.02	
祖父母との同居	祖父母ともに同居している	1.00		n.s.	1.00		n.s.
	祖父母のいずれか一方と同居している	1.02	0.83 - 1.25		1.18	0.96 - 1.45	
	祖父母ともに同居していない	0.91	0.78 - 1.06		1.00	0.85 - 1.17	
最も年齢の近い同胞との年齢差	同胞がない	1.00		0.003	1.00		0.018
	1～3歳差	0.77	0.64 - 0.93		0.90	0.74 - 1.00	
	4～6歳差	0.95	0.77 - 1.16		1.04	0.84 - 1.29	
	7～9歳差	0.66	0.46 - 0.93		0.73	0.51 - 1.04	
	10歳差以上	0.96	0.72 - 1.28		1.26	0.93 - 1.70	
	双生児もしくは三つ子	0.67	0.40 - 1.13		0.71	0.42 - 1.21	
同居中の大人からの暴力****	なし	1.00		< 0.001	1.00		< 0.001
	あり	5.22	4.37 - 6.23		4.24	3.53 - 5.08	

* 過去1年以内にいじめられた体験のある生徒

** 各項目の欠損データは、統計解析から除外

*** 強制投入法によるロジスティック回帰モデル

**** 過去1カ月以内に同居中の大人から暴力を受けた体験のある生徒

いじめの加害体験と関連する家庭関連要因（表 3）

いじめの加害体験と有意な関連が認められた家庭関連要因は、「同居中の大人からの暴力」であった。いじめの被害体験と有意な関連を示した「両親との同居」、「最も年齢の近い同胞との年齢差」については、加害体験とは有意な関連を認めなかった。

表 3 いじめ体験（加害体験）*と関連する家庭関連要因

（中学生 N = 18104）（ロジスティック回帰分析**）

変数	パラメーター	Unadjusted odds ratios			Adjusted odds ratios***		
		OR	95% CI	p value	OR	95% CI	p value
年齢		0.69	0.67 - 0.71	< 0.001	0.70	0.68 - 0.72	< 0.001
性別	男子	1.00		< 0.001	1.00		< 0.001
	女子	0.52	0.47 - 0.58		0.52	0.47 - 0.58	
父母との同居	父母ともに同居している	1.00		n.s.	1.00		n.s.
	父母のいずれか一方と同居している	0.96	0.85 - 1.09		1.09	0.96 - 1.24	
	父母ともに同居していない	0.82	0.64 - 1.05		0.99	0.77 - 1.29	
祖父母との同居	祖父母ともに同居している	1.00		n.s.	1.00		n.s.
	祖父母のいずれか一方と同居している	0.85	0.71 - 1.02		0.98	0.81 - 1.18	
	祖父母ともに同居していない	0.97	0.85 - 1.11		1.10	0.94 - 1.24	
最も年齢の近い同胞との年齢差	同胞がない	1.00		n.s.	1.00		n.s.
	1～3歳差	0.99	0.84 - 1.17		1.14	0.96 - 1.36	
	4～6歳差	0.98	0.81 - 1.19		1.03	0.85 - 1.26	
	7～9歳差	0.79	0.58 - 1.07		0.87	0.63 - 1.19	
	10歳差以上	0.83	0.63 - 1.10		1.08	0.80 - 1.44	
	双子見もしくは三つ子	1.13	0.76 - 1.68		1.17	0.77 - 1.78	
同居中の大人からの暴力****	なし	1.00		< 0.001	1.00		< 0.001
	あり	4.17	3.51 - 4.94		3.43	2.87 - 4.10	

* 過去1年以内にいじめた体験のある生徒

** 各項目の欠損データは、統計解析から除外

*** 強制投入法によるロジスティック回帰モデル

**** 過去1カ月以内に同居中の大人から暴力を受けた体験のある生徒

考 察

本研究は、国際的にも最大規模の思春期・青年期標本（18,000名以上）を対象として、いじめと家庭関連要因との関連、特に世帯構成・兄弟（同胞）構成が学校でのいじめに有意に関連することを始めて明らかにした。

本研究におけるいじめの頻度は、被害体験（中学生群 11.2%、高校生群 4.2%）、加害体験（中学生群 15.9%、高校生群 4.2%）ともに国際的な先行研究の知見と近似するものであった（Nansel et al, 2004）。また、いじめの被害体験者でもあり加害体験者でもある生徒（重複群）が、中学生集団の 4.7%、高校生集団の 1.1%存在することが判明したが、この重複群の頻度も国際的知見（6%前後）と類似する結果であった（Arseneault et al., 2009, Nansel et al, 2001）。

これまでの先行研究では、家庭における親からの暴力や虐待が、子どものいじめの加害体験および被害体験と有意に関連することが報告されており（Shields & Cicchetti, 2001, Baldry, 2003）、本研究でも同様の結果が得られた。過去1カ月以内に同居中の大人から暴力を受けた経験のある生徒は、そうでない生徒に比べ、いじめの加害者となるリスクが約3倍、いじめの被害者になるリスクが4倍、それぞれ高いことが明らかとなった。家庭で大人から暴力を受けている生徒は、いじめに巻き込まれるリスクが顕著に高いことが確認された。

いじめと家庭関連要因との関連について検討した先行研究では、上記の家庭内暴力・虐待を除くと、母親のうつ病（Beran & Violato, 2004）、世帯の社会経済的状態（SES）（Wolk et al, 2001）などがいじめと有意に関連することが報告されている。本研究では、いじめと家族構成との関連を始めて検討し、

「いじめの被害体験」と「両親との同居状況」および「最も年齢の近い同胞との年齢差」が有意に関連することを見出した。同胞（兄弟姉妹）がいない生徒に比べ、1～3歳差の兄弟姉妹がいる生徒は学校でいじめられるリスクが有意に低いことが明らかとなった。最も年齢の近い同胞との年齢差が4歳以上になると、有意なリスク低減は認められなかった。年齢が近い同胞がいることによって、いじめられるリスクが有意に下がる可能性が示唆された。

本研究においては、以下のような複数の限界がある。一つ目は、学校をベースにサンプリングを行ったため、学校に来ていない生徒、特にすでに不登校になっている生徒の回答が本調査には含まれていない点である。調査実施日に欠席していた798名のうち、241名（参加校生徒総数の1.2%）は、1カ月以上の不登校状態にある生徒であった。以上の点で、思春期一般人口標本として結果を解釈することに限界があると思われる。二つ目は、「いじめ」の定義についての厳密性である。本調査では、いじめの有無は、本人の自己申告によってのみ判定しており、客観的な第三者による観察等に基づいていない。そうした点で、いじめの客観的事実の精度に限界がある。三つ目は、交絡要因について情報が不足している点である。本調査では、いじめに影響を与える家庭環境要因について検討を試みたが、学校をベースとした調査の性質上、世帯の社会経済的状況(SES)についての情報が得られていない。世帯の社会経済的状況が家族構成、同居中の大人から暴力のリスクに影響を与えている可能性が否定できないため、今後、そうした交絡要因を検討項目に含めた調査が必要であろう。四つ目は、本調査が横断的調査である性質上、因果関係を厳密に明らかにすることが困難である。しかしながら、「いじめ」が一部の構造的な家庭環境要因に影響を与えるという方向性の因果関係は考えにくい（例：いじめられていることが、兄弟の年齢差に影響を与える、等）、家庭環境要因が学校でのいじめに影響を与えているものと推測される。いずれにしても、今後、縦断的な追跡研究によって、本調査で見出された関連性の因果関係の解明を試みる必要があると思われる。

引用文献

- Arseneault L, Bowes W, Shakoor S. Bullying victimization in youths and mental health problems: Much ado about nothing? *Psychological Medicine*, in press
- Nansel TR, Craig T, Overpeck MD et al. Cross-national consistency in the relationships between bullying behaviors and psychosocial adjustment. *Archives of Pediatric and Adolescent Medicine* 158, 730-736, 2004
- Klomek AB, Sourander A, Niemela S, et al. Childhood bullying behaviors as a risk for suicide attempts and completed suicide: a population-based birth cohort study. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry* 48, 254-261, 2009
- Herba CM, Ferdinand RF, Stijnen T et al. Victimization and suicide ideation in the TRAILS study: specific vulnerabilities of victims. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 49, 867-876, 2008
- Sourander A, Jensen P, Ronning JA et al. What is the early adulthood outcome of boys who bully

- or are bullied in childhood? The Finnish From a Boy to a Man study. *Pediatrics* 120, 397-404, 2007
- Bowes L, Arseneault L, Maughan B et al. School, neighborhood and family factors are associated with children's bullying involvement: a nationally-representative longitudinal study. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry* 48, 545-553, 2009
- Shields A, Cicchetti D. Parental maltreatment and emotional dysregulation as risk actors for bullying and victimization in middle childhood. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology* 30, 349-363, 2001
- Nishida A, Tani H, Nishimura Y et al. Associations between psychotic-like experiences and mental health status and other psychopathologies among Japanese early teens. *Schizophrenia Research* 99, 125-133, 2008
- Nansel TR, Overpeck M, Pilla RS et al. Bullying behaviors among US youth: prevalence and association with psychosocial adjustment. *Journal of the American Medical Association* 285, 2094-2100, 2001
- Baldry AC. Bullying in schools and exposure to domestic violence. *Child Abuse and Neglect* 27, 713-732, 2003
- Beran TN, Violato C. A model of childhood perceived peer harassment: analyses of the Canadian National Longitudinal Survey of Children and Youth Data. *Journal of Psychology* 138, 129-147, 2004 文献

謝 辞

高知大学医学部神経精神科学教室下寺信次准教授，ならびに東京大学保健管理センター佐々木司教授のご協力・ご指導に心より感謝申し上げます。